

# 挫折経験のとらえ方が個人に及ぼす影響についての検討

姜 信善・清沢 彩夏

The Effect of View of the Frustration experience for Person

Sinsun KANG, Ayaka SEIZAWA

キーワード：青年期，挫折経験のとらえ方，挫折の影響，仮想的有能感

keywords：Adolescence, View of the Frustration experience, Effect of frustration, Assumed-Competence

## 問題及び目的

人は人生の中ですべてが望み通りにいくわけではなく、困難な状況に直面する場合がある。神原(2009)の研究では、青年期後期の約7割が挫折を経験していることが報告されている。大石・岡本(2010)は、青年期における挫折経験の内容を調べており、部活動や進学、人間関係において挫折を多く経験していることを示している。このことから、青年期における日常生活の中で、人は多少なりとも挫折を経験していると言えるだろう。

神原(2009)は、挫折とは何かを解明するため、挫折と失敗をそれぞれどのようなことだととらえているかを調べ、挫折観と失敗観との比較を行っている。18～66歳の112名を対象に質問紙法で失敗と挫折の比喩生成の記入を求めた結果、失敗や挫折の頻度についての「頻度」、失敗や挫折からの回復についての「回復」、失敗や挫折から何かを学べたり成長できたりすることについての「成長」、失敗や挫折の経験によってその先の方向性が決まることについての「転機」という挫折と失敗の双方に共通する4側面を見出した。失敗と挫折の詳しい比喩内容をみても、まず「頻度」に関して、失敗は“よくあるもの”としてとらえられやすいが、挫折は“1度もしくはたまにあるもの”としてとらえられやすいことが示されている。次に、「回復」に関して、失敗は“すぐに回復できるもの”としてとらえられやすいが、挫折は“回復に時間や労力が必要なもの”としてとらえられている。続いて、「成長」では、失敗と挫折のとらえ方にはほとんど差がなく、いずれも“成長につながるもの”、“糧となるもの”としてとらえられている。最後に、「転機」に関しては、失敗は“成功へのステップ”としてとらえられるが、挫折は、“分岐点”であったり、“終わりであ

り始まり”としてとらえられることが示されている。このことから挫折と失敗のとらえ方には差があることが示唆されており、失敗と比較したときの挫折の特徴が明らかとなっている。

また、上述した神原(2009)の研究では、“頻度”、“回復”、“成長”、“転機”の挫折観4項目(側面)と自己成長感との関連について調べており、“回復”、“成長”、“転機”の得点が高い者が挫折後に感じている自己成長感も高いことを示している。その中でも挫折観の項目の1つである“転機”、「挫折とは、今後の自分の人生を左右するものだ」については、自己の人生を左右するという点においてポジティブな場合だけではないことも考えられることが指摘されている。挫折経験が個人にとってどのようなものであるかにより、与えられる影響は大きく異なることが考えられる。そこで、挫折経験のとらえ方に着目し、挫折経験の影響を調べることにより、挫折経験が個人に与える影響について明らかにできるであろう。しかし、神原(2009)においてのように、失敗と比較したときの挫折の特徴については調べられているが、挫折そのもののとらえ方についての検討はほとんどみられない。挫折経験のとらえ方と個人に及ぼす影響との関連について明らかにするために、挫折経験そのもののとらえ方に関して、より詳細に調べていく必要があると考えられる。

挫折経験からの過程に関する研究では、大石・岡本(2010)は、半構造化面接による調査を実施し、挫折経験過程における心理状態を調べている。その結果、挫折経験直後は、ほぼ全員が情緒的に混乱した状態に陥ることを示しており、挫折経験が青年に及ぼす影響の強さを指摘している。古木・森田(2009)は、大学生を対象に半構造化面接を行い、挫折経験から自己受容に至るプロセスについて検討

している。挫折を経験した直後には、《良い結果を出せない苦しさ》や《自分を信じられない状態》に移行するが、《ピアの存在》の支えの中、《現在の自分への満足》や挫折経験を《良い経験・思い出》と捉えたり、《自己成長感》を持てるようになり、《挫折をした自分自身の受容》の段階に至ることを示している。このように、挫折を経験することは、人に大きな苦痛を与えると考えられるが、その後のプロセスによっては個人にさまざまな影響を及ぼすのであろう。

神谷・伊藤（1999）は、挫折体験のすべてのエピソードが嫌な思い出のままの「非快化群」は、挫折体験を受容し、挫折体験がすべて快化した「快化群」に比べ絶望感が強く、自分の将来に対してより否定的な見通しを持っていることや、非快化群は内的統制得点が低く、将来を決めていくのは自分であると考え、傾向が弱いことを示している。

近藤・宮戸（2014）は、青年期における挫折・失敗経験の捉え方とストレス反応の関連を検討している。挫折経験者において、挫折対象に対する重要度認知が高いほど、抑うつや不安の反応が強く、失敗経験者においては、対象への重要度認知が高いほど、不機嫌や怒りの反応が強いことを明らかにしている。このように、挫折と失敗の経験に対する認知がストレス反応の違いをもたらすことが明らかにされており、挫折経験をどのようにとらえるかにより青年に与える影響は異なることが示唆されている。たとえば、仮想的有能感との関連はどうだろうか。速水・木野・高木（2005）は、有能感が傷つく危機に晒されることになると、防衛的に他の事態で他者を軽視することにより自己の有能感を保とうとする傾向が強まると予想している。このように、自分の実績とは関係なく、他者を低く評価することで得ようとする有能感の感覚を仮想的有能感と呼び、「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」と仮想的有能感を定義している（速水・木野・高木, 2004）。挫折は自分の能力を否定され、自尊心を傷つけやすい経験と考えられる。そのため、挫折経験のとらえ方によっては、他者を軽視し、自己の有能感を高める傾向につながりやすくなるのではないだろうか。そこで本研究では、挫折経験のとらえ方は仮想的有能感との関連が予想され、挫折感のもう一つの影響として仮想

的有能感を取りあげ、検討することとする。

なお、挫折の定義に関しては、木村（2012）も指摘しているように、研究によって少しずつ異なっている。辞書（『明鏡国語辞典』）では、挫折を「事業・計画などが途中でくじけ、だめになること。また、そのためにやり遂げようとする意欲や気力をなくすこと。」としている。そこで本研究では、対象者が大学生であることを考慮に入れ、「学業、人間関係、部活動などが途中でくじけ、だめになること。また、そのためにやり遂げようとする意欲や気力をなくすこと。」と定義し、検討を行う。

以上のことから、挫折経験のとらえ方が個人に及ぼす影響は多様であることが予想され、これらについて検討することが本研究での全体的目的である。そのための具体的仮説は以下の通りである。

仮説1) 挫折をこれからの人生の中で活かせるもの、今後の糧となる経験というようなポジティブなものとしてとらえることは、個人にポジティブな影響を及ぼすであろう。

仮説2) 他人より劣っていると感じさせたり、自信をなくさせたりするものとして挫折経験をとらえた場合、自己の有能感を保つため、防衛的になりやすく、このようなネガティブな挫折経験のとらえ方は仮想的有能感と強い関連を示すであろう。

## 挫折経験のとらえ方及び挫折経験の影響に関する尺度作成（研究1）

### 1. 挫折経験のとらえ方に関する尺度作成（研究1-1）

#### 予備調査

##### 目的

予備調査では、挫折をどのようなものとしてとらえているかを調べる。そして、挫折経験のとらえ方に関する測定項目を作成することを目的とする。

##### 方法

###### 【対象者】

大学生計177名（男性84名、女性93名）

###### 【調査時期】

2015年4月

###### 【調査内容】

挫折経験をどのようにとらえているかについてたずねる内容であり、自由記述により回答が求められた。具体的な内容は以下の通りである。

・「あなたにとって、挫折とはどのようなものです

か。」

結果

#### ①測定項目内容の収集

挫折経験のとらえ方について得られた回答内容は、以下のようなカテゴリに分類された。

1つ目のカテゴリは、人が生きていく中で経験するありふれたものとしてとらえる「普遍」の内容である。具体的には、“誰もが少なからず経験するもの”“人が成長する段階で必ず経験するもの”などである。

2つ目のカテゴリは、その経験から何かを学べるものやステップアップする機会としてとらえる「自己成長」の内容である。具体的には、“大きく成長するための糧となるもの”、“自分を磨くチャンスとなるもの”などである。

3つ目のカテゴリは、自分自身を落ち込ませたり、物事への気力をなくしたりするものとしてとらえる「ダメージ」の内容である。具体的には、“自分に自信をなくすもの”“物事へのやる気をなくさせるもの”などである。

4つ目のカテゴリは、良い面と悪い面とが入り混じった複雑なものとして挫折をとらえる「両価」の内容である。具体的には、“自分の心を強くさせるものだと思いたいが、努力が報われていないようで悔しいもの”“次の失敗を防ぐために役立つが、自分の思いや期待を大きく裏切るもの”などである。

#### ②測定項目の作成・検討

予備調査から分類されたカテゴリについて、再検討や修正を行い、項目の作成を行った。最終的に挫折経験のとらえ方に関して20項目が測定項目とされた。

### 本調査

目的

予備調査により作成された測定項目を用い、挫折経験のとらえ方に関する尺度を作成することを目的とする。

方法

#### 【対象者】

大学生計453名（男性278名、女性175名）

#### 【調査時期】

2015年11月～12月

#### 【調査内容】

予備調査で得られた挫折経験のとらえ方の項目に

ついて、それぞれ「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で回答が求められた。

#### 【分析手続き】

質問項目に対する回答を、「あてはまる」5点、「ややあてはまる」4点、「どちらともいえない」3点、「あまりあてはまらない」2点、「あてはまらない」1点とし、プロマックス回転による因子分析を行った。

#### 結果及び考察

予備調査の結果をもとに作成した挫折経験のとらえ方に関する質問項目の回答について、因子分析を行った。固有値の減退状況などから、4因子を仮定することができた。プロマックス回転後の因子パターンはtable1-1に示す。

第1因子は“自分が他人より劣っていると感じさせるもの”“自分の心を強くさせるものだと思いたいが、努力が報われていないようで悔しいもの”などの項目から構成されている。この因子は、自分自身や自分のやってきたことが否定されるなど自己にダメージを与えるものとして挫折をとらえる内容が含まれている。そこで、第1因子は「ダメージ」因子と命名された。

第2因子は“自分を磨くチャンスとなるもの”“生きていく中で、新しいことを学ぶために不可欠なもの”などの項目から構成されている。この因子は、挫折経験を自分の知らなかったことを学ぶことができる、自分を鍛えるものとしてとらえる内容が含まれている。そこで、第2因子は「自己成長」因子と命名された。

第3因子は“誰もが少なからず経験するもの”“社会で生きていく上で、誰しも身に覚えがあるもの”などの項目から構成されている。この因子は、挫折を経験することは日常生活でよくある出来事としてとらえる内容が含まれている。そこで、第3因子は「普遍」因子と命名された。

第4因子は“物事へのやる気をなくさせるもの”“無気力に陥らせるもの”の項目から構成されている。この因子は、挫折経験を物事への気力をなくすものとしてとらえる内容が含まれている。そこで、第4因子は「意欲喪失」因子と命名された。

因子確定後にCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、因子ごとの $\alpha$ 係数は、第1因子、第2因子、第3因子、第4因子、それぞれにおいて順に0.84、0.88、0.84、0.89であり、高い信頼性が得られたと言える。

table 1-1 挫折経験のとらえ方に関する項目の因子分析（プロマックス回転後の因子パターン）

No. 項目内容	F1	F2	F3	F4	共通性
<b>F1 「ダメージ」</b>					
9 自分が他人より劣っていると感じさせるもの	.779	-.034	-.077	-.032	.538
11 自分の心を強くさせるものだと思いたいが、努力が報われていないようで悔しいもの	.773	-.019	.086	-.121	.553
18 自分のことを振り返る機会にはなったが、今までの頑張りが認められていないようでやりきれない気持ちになるもの	.721	.144	-.091	.038	.571
8 自分に自信をなくすもの	.687	-.083	-.017	.159	.592
13 次の失敗を防ぐために役立つが、自分の思いや期待を大きく裏切るもの	.650	.044	.069	-.032	.455
4 絶望を感じさせるもの	.604	-.045	-.020	.099	.423
3 乗り越えられたら力を養うことにつながるが、忘れてしまいたいもの	.414	-.077	.048	.005	.175
<b>F2 「自己成長」</b>					
5 自分を磨くチャンスとなるもの	-.046	.873	-.135	-.024	.631
6 生きていく中で、新しいことを学ぶために不可欠なもの	.028	.793	-.058	-.052	.595
19 自分ができないことを知る機会であり、成長につながるもの	.003	.772	.029	.073	.623
20 心を強くさせるもの	-.114	.755	-.003	.012	.536
15 大きく成長するための糧となるもの	-.035	.715	.130	.041	.621
7 自分にとっての試練となるもの	.118	.518	.106	.015	.399
<b>F3 「普遍」</b>					
14 誰もが少なからず経験するもの	-.108	-.040	.955	.125	.818
12 社会で生きていく上で、誰しも身に覚えがあるもの	.064	.019	.759	-.075	.629
10 人が成長していく段階で必ず経験するもの	.086	.268	.547	-.092	.596
<b>F4 「意欲喪失」</b>					
17 物事へのやる気をなくさせるもの	.260	.007	.043	.721	.804
16 無気力に陥らせるもの	.370	.029	-.024	.644	.811
因子間相関	F1	-			
	F2	.246	-		
	F3	.336	.590	-	
	F4	.551	-.054	.012	-
$\alpha$ 係数		.843	.876	.843	.891

## 2. 挫折経験の影響に関する尺度作成（研究 1-2）

### 予備調査

#### 目的

予備調査では、挫折経験からどのような影響を受けたかについて調べる。そして、挫折経験の影響に関する測定項目を作成することを目的とする。

#### 方法

##### 【対象者】

大学生計77名（男性31名、女性46名）

##### 【調査時期】

2015年1月

##### 【調査内容】

挫折経験に関わらず、生活の中でのさまざまな負の経験について調べることによって、その経験の影響に関する幅広い内容の回答が得られることが予想され、不本意な出来事について調べられた。不本意な出来事の経験からどのような影響を受けたかについて、自由記述により回答が求められた。具体的な

内容は以下の通りである。

・「不本意な出来事は、あなたの価値観や生活、恋愛、将来などにどのような影響を与えたと思いますか。」

予備調査の結果から、挫折経験と考えられるエピソードが多く回答として得られた。そこで、回答の中から挫折経験に関するものを抜粋し、用いることとした。

#### 結果

##### ①測定項目内容の収集

予備調査の結果から、挫折経験の影響について収集された回答内容は、4つのカテゴリに分類された。1つ目のカテゴリは、自分に否定的になり、自信がなくなったという「自己脆弱感」の内容であった。具体的には、“自分の考え方に不安を抱くようになった”“また失敗するのではないかと不安になり、行動が消極的になった”などである。

2つ目のカテゴリは、他者を信じられなくなった

という「他者不信」の内容であった。具体的には、“人はすぐに手のひらを返すものだと思うようになった”“周りからの親切を素直に受け入れられなくなった”などである。

3つ目のカテゴリは、他者のことを考えて行動するようになったという「対人配慮」の内容であった。具体的には、“相手の気持ちを考えた上での行動を意識するようになった”“他者の悲しみをよりよく理解できるようになった”などであった。

4つ目のカテゴリは、苦しい状況に対して前向きに考えるようになったという「苦境耐性」の内容であった。具体的には、“前向きに目標に向かって生きていけるようになった”“苦しい状況の中でも精一杯頑張ろうと思うようになった”などである。

## ②測定項目の作成・検討

予備調査により分類されたカテゴリについて、研究の目的に合わせて再検討や修正を行い、項目の作成を行った。最終的に挫折経験の影響に関して20項目が測定項目とされた。

## 本調査

### 方法

#### 【対象者】

大学生計453名（男性278名，女性175名）

#### 【調査時期】

2015年11月～12月

#### 【調査内容】

予備調査で得られた挫折経験の影響の項目について、それぞれ「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で回答が求められた。

#### 【分析手続き】

質問項目に対する回答を、「あてはまる」5点、「ややあてはまる」4点、「どちらともいえない」3点、「あまりあてはまらない」2点、「あてはまらない」1点とし、プロマックス回転による因子分析を行った。

### 結果及び考察

予備調査の結果をもとに作成した挫折経験へのとらえ方に関する質問項目の回答について、因子分析を

table 1-2 挫折経験の影響に関する項目の因子分析（プロマックス回転後の因子パターン）

No. 項目内容	F1	F2	F3	F4	共通性
<b>F1 「自己脆弱感」</b>					
14 自分の考え方に不安を抱くようになった	.808	.136	-.097	-.020	.620
20 自分に否定的になり、自信がなくなった	.804	-.013	.065	-.075	.730
13 また失敗するのではないかと不安になり、行動が消極的になった	.803	-.010	.034	.031	.675
18 物事をうまく進めていく自信がなく、すぐに諦めるようになった	.755	-.081	.022	.039	.563
11 自分は周りよりも遅れをとっていると常に考えるようになった	.638	.048	.029	.084	.453
<b>F2 「対人配慮」</b>					
4 自分勝手な言動をしないよう相手の立場を考えるようになった	.058	.902	-.005	-.102	.740
17 人の気持ちを思いやることができるようになった	-.028	.876	-.024	-.008	.737
7 相手の気持ちを考えた上での行動を意識するようになった	.024	.809	.084	-.052	.668
3 他者の悲しみをよりよく理解できるようになった	.057	.750	-.062	.045	.597
15 今までより視野が広がり、多くの人に気配りができるようになった	-.076	.609	.027	.272	.639
<b>F3 「他者不信」</b>					
9 あまり信用してはいけない人がいると考えるようになった	-.062	.061	.859	-.055	.690
10 人はすぐに手のひらを返すものだと思うようになった	.012	-.005	.754	.044	.588
5 周りの人が疑わしく感じられ、人と関わることを遠ざけるようになった	.225	-.020	.603	-.022	.584
6 周りからの親切を素直に受け入れられなくなった	.232	-.065	.575	.034	.540
<b>F4 「苦境耐性」</b>					
12 将来について、挫折が当たり前、そこから頑張るとポジティブに考えるようになった	.139	-.108	-.055	.831	.574
19 前向きに目標に向かって生きていけるようになった	.000	.106	.000	.790	.734
8 どんなつらいことがあっても、前向きに考えられるようになった	-.123	.095	.066	.679	.578
因子間相関					
	F1	-			
	F2	.234	-		
	F3	.669	.298	-	
	F4	-.085	.594	.120	-
α係数					
		.879	.902	.850	.824

行った。固有値の減退状況などから、4 因子を仮定することができた。プロマックス回転後の因子パターンは table 1-2 に示す。

第1因子は“自分の考え方に不安を抱くようになった”“自分に否定的になり、自信がなくなった”などの項目から構成されている。この因子は、自分に自信を無くし、自己の考え方が否定的になったことや、行動が消極的になったことに関する内容が含まれている。そこで、第1因子は「自己脆弱感」と命名された。

第2因子は“自分勝手な言動をしないよう相手の立場を考慮するようになった”“人の気持ちを思いやることができるようになった”などの項目から構成されている。この因子は、他者のことを意識した考え方や行動をするようになるなど他者への配慮に関する内容が含まれている。そこで、第2因子は「対人配慮」と命名された。

第3因子は“あまり信用してはいけない人がいると考えるようになった”“人はすぐに手のひらを返すものだと思うようになった”などの項目から構成されている。この因子は、他者に対する信頼感の低下や他者とかわることへの不安に関する内容が含まれている。そこで第3因子は「他者不信」と命名された。

第4因子は“将来について、挫折が当たり前、そこから頑張るとポジティブに考えるようになった”“前向きに目標に向かって生きていけるようになった”などの項目から構成されている。この因子は、苦しい状況の中でも、前向きに考えていけるようになったことに関する内容が含まれている。そこで第4因子は「苦境耐性」と命名された。

因子仮定後に Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ、因子ごとの  $\alpha$  係数は、第1因子、第2因子、第3因子、第4因子、それぞれにおいて順に0.88, 0.90, 0.85, 0.82であり、高い信頼性が得られたと言えよう。

## 挫折経験のとりえ方が個人に及ぼす影響についての検討 (研究2)

### 目的

ここでは本研究の仮説を検証することが目的である。まず、研究 2-1 では仮説 1 を、研究 2-2 では仮説 2 を検討していく。そのための具体的な研究の手続きについては以下の通りである。

### 方法

#### 【対象者】

研究 2-1, 2-2 において同様である。  
大学生計453名 (男性278名, 女性175名)

#### 【調査時期】

研究 2-1, 2-2において同様である。  
2015年11月～12月

#### 【調査内容】

##### ①研究 2-1 の調査内容について

研究1で作成された挫折経験のとりえ方及び挫折経験の影響に関する各尺度の項目について、それぞれ「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で回答が求められた。

##### ②研究 2-2 の調査内容について

- ・研究 1-1 で作成された挫折経験のとりえ方尺度の各項目について、それぞれ「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で回答が求められた。
- ・速水 (2006) の仮想的有能感尺度11項目 (table 2-3) を用い、各項目について、それぞれ「よく思う」(5点)～「全く思わない」(1点)の5件法で回答が求められた。

#### 【分析手続き】

##### ①研究 2-1 の分析手続き

まず、挫折経験のとりえ方尺度の下位尺度項目得点と挫折経験の影響尺度の下位尺度項目得点との相関関係を求める。次に、挫折経験のとりえ方と挫折経験の影響との関連を検討するため、重回帰分析を行う。

##### ②研究 2-2 の分析手続き

まず、挫折経験のとりえ方の下位尺度項目得点と仮想的有能感の尺度項目得点との相関関係を求める。次に、挫折経験のとりえ方と仮想的有能感の関連を検討するため、重回帰分析を行う。

## 結果及び考察

### 1. 挫折経験のとりえ方が個人に及ぼす影響について (研究 2-1)

挫折経験のとりえ方が個人に及ぼす影響について具体的に調べるため、研究1で作成された挫折のとりえ方、及びその影響に関する尺度を用い、検討を行った。その結果についてまず述べていく。

(1) 挫折経験のとりえ方と挫折経験の影響との相関関係の結果について

挫折経験のとらえ方と影響との関係について検討を行うため、相関関係が求められた。相関関係の分析結果は、table 2-1 に示す。

挫折経験のとらえ方尺度第1因子「ダメージ」は挫折経験の影響尺度において、第4因子「苦境耐性」を除いた3因子すべてとの間において有意な正の相関関係が見られた（順に、 $p < .001$ ,  $p < .01$ ,  $p < .001$ ）。挫折経験のとらえ方尺度第2因子「自己成長」は、挫折経験の影響尺度第2因子「対人配慮」及び第4因子「苦境耐性」との間に有意な正の相関関係が見られたが（ $p < .001$ ）、影響尺度第1因子「自己脆弱感」、第3因子「他者不信」との間では、有意傾向ではあるが負の相関関係が示された。挫折経験のとらえ方尺度第3因子「普遍」においては、挫折経験の影響尺度第2因子「対人配慮」、第4因子「苦境耐性」との間に有意な正の相関関係が見られた（ $p < .001$ ）が、第1因子「自己脆弱感」との間では、弱い正の相関関係が有意傾向として示された。挫折経験のとらえ方尺度第4因子「意欲喪失」の場合、挫折経験の影響尺度第2因子「対人配慮」を除いた3因子すべてにおいて有意な結果が見られ（ $p < .001$ ）、第1因子「自己脆弱感」、第3因子「他者不信」との間には正の相関関係、第4因子「苦境耐性」との間には負の相関関係が示された。

(2) 挫折経験のとらえ方が個人に及ぼす影響の重回帰分析の結果について

挫折経験のとらえ方が個人に及ぼす影響をより具体的に検討するため、挫折経験のとらえ方の下位尺度項目合計得点を独立変数、挫折経験の影響の下位尺度得点を従属変数とし、重回帰分析が行われた。重回帰分析の結果は、table 2-2 に示す。

①挫折経験の影響尺度第1因子「自己脆弱感」に挫折経験のとらえ方が及ぼす影響

挫折経験のとらえ方尺度第1因子「ダメージ」の偏回帰係数は、 $(\beta) = .246$  ( $t(438) = 4.046, p < .001$ )であった。とらえ方尺度第2因子「自己成長」の偏回帰係数は、 $(\beta) = -.164$  ( $t(438) = -3.172, p < .01$ )、とらえ方尺度第4因子「意欲喪失」の偏回帰係数は、 $(\beta) = .231$  ( $t(438) = 3.910, p < .001$ )であった。したがって、挫折経験の影響尺度第1因子「自己脆弱感」に及ぼす影響は、挫折経験のとらえ方尺度第1因子「ダメージ」、第2因子「自己成長」、第4因子「意欲喪失」においてのみ有意であった。このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2 = .455$ であり、有意であった（ $F(4,438) = 28.596, p < .001$ ）。

②挫折経験の影響尺度第2因子「対人配慮」に挫折経験のとらえ方が及ぼす影響

挫折経験のとらえ方尺度第1因子「自己成長」においてのみ有意であり、偏回帰係数は、 $(\beta) = .364$

table 2-1 挫折経験のとらえ方尺度各因子合計得点と挫折経験の影響尺度各因子項目合計得点との相関関係

	自己脆弱感	対人配慮	他者不信	苦境耐性
ダメージ	.397***	.148**	.226***	-.055
自己成長	-.066†	.404***	-.068†	.406***
普遍	.078†	.270***	.048	.265***
意欲喪失	.401***	.051	.211***	-.165***

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

table 2-2 「挫折経験のとらえ方→挫折経験の影響」の重回帰分析の結果

	自己脆弱感	対人配慮	他者不信	苦境耐性
ダメージ	.246***	.098	.166*	-.019
自己成長	-.164**	.364***	-.144*	.373***
普遍	.078	.043	.075	.079
意欲喪失	.231***	-.039	.094	-.178**
重相関係数 (R)	.455***	.414***	.266***	.450***

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

(注) 数値は標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) を表す

( $t(438)=6.894, p<.001$ )であった。このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.414$ であり、有意であった( $F(4,438)=22.647, p<.001$ )。

③挫折経験の影響尺度第3因子「他者不信」に挫折経験のとらえ方が及ぼす影響

挫折経験のとらえ方尺度第1因子「ダメージ」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.166$  ( $t(439)=2.528, p<.05$ )であった。挫折経験のとらえ方尺度第2因子「自己成長」の偏回帰係数は、 $(\beta)=-.144$  ( $t(438)=-2.569, p<.01$ )であった。したがって、挫折経験の影響尺度第3因子「他者不信」に及ぼす影響は、挫折経験のとらえ方尺度第1因子「ダメージ」、第2因子「自己成長」においてのみ有意であった。このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.266$ であり、有意であった ( $F(4,439)=8.363, p<.001$ )。

④挫折経験の影響尺度第4因子「苦境耐性」に挫折経験のとらえ方が及ぼす影響

挫折経験のとらえ方尺度第2因子「自己成長」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.373$  ( $t(438)=7.179, p<.001$ )であった。挫折経験のとらえ方尺度第4因子「意欲喪失」の偏回帰係数は、 $(\beta)=-.178$  ( $t(438)=-3.008, p<.01$ )であった。したがって、挫折経験の影響尺度第4因子「苦境耐性」に及ぼす影響は、挫折経験のとらえ方尺度第2因子「自己成長」、第4因子「意欲喪失」においてのみ有意であった。このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.450$ であり、有意であった ( $F(4,438)=27.857, p<.001$ )。以上の結果について考察を述べていく。

まず、挫折経験のとらえ方尺度第2因子「自己成長」についてみていく。

重回帰分析の結果、挫折経験のとらえ方尺度第2因子「自己成長」は、挫折経験の影響尺度4つのすべての因子と有意な結果が得られ、挫折経験の影響尺度第1因子「自己脆弱感」、第3因子「他者不信」に負の影響、第2因子「対人配慮」、第4因子「苦境耐性」に正の影響が示された。本研究においての「自己成長」因子は、挫折をその経験から何かを学べるもの、自分を鍛えるものとしてとらえる項目内容で構成されている。つまり、挫折を自分にとって有意義な経験としてとらえた場合、その経験から得られるものを自ら積極的に見つけ出すことが考えられる。そのプロセスの中で、自分や他者に対する内省や配慮の気持ちを持ちやすくなるのではないだろうか。例えば、「自己成長」の因子項目内容にある

ように“挫折を自分ができないことを知る機会”や“自分自身を磨くチャンス”としてとらえた場合、挫折から何かを学ぼうとすることで、自分の視野を広げたり、周囲への気配りにつながりやすくなるのではないだろうか。「自己成長」が「自己脆弱感」に負、「対人配慮」に正の影響を及ぼしたことは、このことによるものであろう。また、挫折について自分自身を鍛えるものととらえることは、今後また困難な状況に置かれても自分は乗り越えていけるという自信を身につけやすくなるのではないだろうか。さらに、自分への自信を得ることで、いたずらに人を疑ったりすることなく、他者に素直になれるのではないだろうか。「自己成長」が「他者不信」に負の影響を、「苦境耐性」に正の影響を及ぼしたのはこのことによるものと考えられる。

次に、挫折経験のネガティブなとらえ方である第1因子「ダメージ」及び第4因子「意欲喪失」についてみていく。とらえ方第1因子「ダメージ」は、挫折経験の影響尺度第1因子「自己脆弱感」、第4因子「他者不信」に正の影響が示された。本研究において「ダメージ」因子は“自分が他人より劣っていると感じさせるもの”“自分の心を強くさせるもの”“自分のことを振り返る機会にはなかったが、今までの頑張りが認められていないようでやりきれない気持ちになるもの”などで構成されており、挫折を自分の能力や努力を否定されたり、他者より劣っているという思いから自尊心が傷付けられたりするものとしてとらえる内容である。このことを考えると、挫折を自分の能力や努力を否定されるものとしてとらえることは、今後においても自信を持ちにくく、物事がうまくいかないときにすぐ諦めやすくなったり、投げ出してしまったりするのではないだろうか。「ダメージ」が「自己脆弱感」につながったのはこのことによるものと解釈される。また、「ダメージ」因子の項目“自分が他人より劣っていると感じさせるもの”のように、他人との比較により自己否定感を抱いたとき、対人場面においても消極的になりやすく、周りからの親切や配慮に対して素直になれないのではないだろうか。「ダメージ」が「他者不信」につながったのはこのことが考えられるであろう。

それに対して、とらえ方「意欲喪失」因子は「自己脆弱感」に正の影響、「苦境耐性」に負の影響を



及ぼすことが示された。「意欲喪失」因子は“物事へのやる気をなくさせるもの”“無気力に陥らせるもの”で構成されており、物事への気力を低下させるものとしてとらえる内容である。このようなとらえ方は、挫折を乗り越えたり、その状況と向き合ったりすることができず、自分の考え方に不安を抱きやすくなったり、今後困難にあったときポジティブに考えにくくなったりすることが予想され、とらえ方「意欲喪失」が「自己脆弱感」、「苦境耐性」につながったのはこのことによるものと推察される。

なお、挫折経験のとらえ方尺度第3因子「普遍」は、相関関係では、挫折経験の影響尺度第2因子「対人配慮」、第4因子「苦境耐性」において関連がみられたが、重回帰分析の結果、挫折経験の影響尺度のどの因子においても有意な結果は得られなかった。

「普遍」因子は“誰もが少なからず経験するもの”“人が成長していく段階で必ず経験するもの”という項目内容であり、挫折経験そのものを積極的に否定するとらえ方ではないことからポジティブな影響との関連が予想されたが有意な結果は得られなかった。これについてはさらなる検討が必要であろう。

## 2. 挫折経験のとらえ方と仮想的有能感との関連についての検討（研究2-2）

研究2-1において挫折経験のネガティブなとらえ方「ダメージ」及び「意欲喪失」は自己や対人場面において負の影響が示された。そこで「ダメージ」や「意欲喪失」のようなとらえ方は、速水ら（2005）

table 2-3 仮想的有能感尺度

No. 項目内容
1 自分の周りには気のきかない人が多い
2 他人の仕事を見ていると、手際が悪いと感じる
3 話し合いの場で、無意味な発言をする人が多い
4 知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い
5 他人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる
6 自分の代わりに大切な役目を任せられるような有能な人は、私の周りに少ない
7 他人を見ていて「ダメな人だ」と思うことが多い
8 私の意見が聞き入れてもらえなかった時、相手の理解が足りないと感じる
9 今の日本を動かしている人の多くは、たいした人間ではない
10 世の中には、努力しなくても偉くなる人が少なくない
11 世の中には、常識のない人が多すぎる

のいう「仮想的有能感」につながりやすいことが考えられ、これについて検討を行った。その結果及び考察について述べる。

挫折経験のとらえ方と仮想的有能感との関連について検討を行うため、相関関係が求められた。相関関係の分析結果は、table 2-4 に示す。

仮想的有能感において、挫折経験のとらえ方第1因子「ダメージ」、第4因子「意欲喪失」との間に有意な正の相関がみられた（順に、 $p < .01$ ,  $p < .05$ ）。挫折経験のとらえ方と仮想的有能感との関連についてより具体的に検討するため、挫折経験のとらえ方の下位尺度項目合計得点を独立変数、仮想的有能感の下位尺度得点を従属変数とし、重回帰分析が行われた。重回帰分析の結果は、table 2-5 に示す。

挫折経験のとらえ方尺度第1因子「ダメージ」においてのみ有意となり、偏回帰係数は、 $(\beta) = .143$  ( $t(437) = 2.117, p < .05$ )であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は  $R^2 = .153$  であり、有意であった ( $F(4, 437) = 2.626, p < .05$ )。

この結果から、挫折を自分の思いや期待を大きく裏切られるもの、また、自分の努力が報われない経験ととらえた場合、自己への否定感が強まり、自尊心が低下することが予想される。そのため、他者を軽視することにより、自尊心を保とうとしやすくなるのではないかと推察され、本研究の結果はこれによるものと解釈される。

table 2-4 挫折経験のとらえ方尺度各因子合計得点と仮想的有能感尺度因子項目合計得点との相関関係

	仮想的有能感
ダメージ	.143**
自己成長	-.011
普遍	.051
意欲喪失	.098*

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

table 2-5 「挫折経験のとらえ方→仮想的有能感」の重回帰分析の結果

	仮想的有能感
ダメージ	.143*
自己成長	-.065
普遍	.050
意欲喪失	-.003
重相関係数 (R)	.153*

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

(注) 数値は標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) を表す

## 全体考察

本研究では、挫折経験のとらえ方による個人への影響は異なることを仮定とし、挫折経験のとらえ方、及びその影響についての尺度作成を行い、検討を行った。その主な結果についての考察を行う。

まず、挫折経験をポジティブなものとしてとらえる「自己成長」は「他者配慮」、「苦境耐性」に正の影響、「自己脆弱感」及び「他者不信」には負の影響が示された。それに対して、挫折経験をネガティブなものとしてとらえる「ダメージ」は「自己脆弱感」、「他者不信」に正の影響を及ぼすことが示された。このことから、「自己成長」のように、挫折経験を積極的にポジティブなものとしてとらえることは、本研究の影響尺度全ての因子に関連が示され、自己や対人場面においてポジティブな影響を及ぼすことが示された。一方で、「ダメージ」や「意欲喪失」のようなネガティブなとらえ方は、「自己脆弱感」につながりやすく、また、ネガティブなとらえ方の中でも特に「ダメージ」のようなとらえ方は、対人場面にもネガティブな影響を及ぼすことが示された。

神原（2009）は、“頻度”以外の“回復”“成長”“転機”の得点が高い者が挫折後に感じている自己成長感も高いという結果を明らかにしている。本研究において「自己成長」のようなポジティブなとらえ方がポジティブな影響を及ぼすということが示され、神原（2009）を支持する結果が得られたと言えよう。本研究では、挫折経験による影響として、自己だけでなく、対人場面に関する結果についても示され、挫折経験をポジティブにとらえることは、自己だけでなく対人場面においてもポジティブな影響を及ぼすことが明らかとなった。これらの結果から、本研究の仮説1「挫折をこれからの人生の中で活かせるもの、今後の糧となる経験というようなポジティブなものとしてとらえることは、ポジティブな影響を及ぼすであろう」が支持されたと言えよう。

次に、挫折経験のネガティブなとらえ方が仮想的有能感につながりやすいと考えられ、検討を行った。その結果、特に「ダメージ」のようなとらえ方が関連していることが示された。このことから「ダメージ」因子項目にもあるように「自分に自信をなくすもの」「絶望を感じさせるもの」など自分の能力や努力が否定されたようなネガティブなものとして挫折経験を受け止めた場合、仮想的有能感につながり

やすいことが明らかになった。これは、挫折経験によって自尊心が低下しやすく、他者を軽視することで自己の有能感を高めようとすることによるものと考えられる。よって、仮説2「他人より劣っていると感じさせたり、自信をなくさせたりするものとして挫折経験をとらえた場合、自己の有能感を保つため、防衛的になりやすく、このようなネガティブな挫折経験のとらえ方は仮想的有能感と強い関連を示すであろう。」が支持されたと言えよう。

つまり、「ダメージ」のようなネガティブなとらえ方は、自己及び対人場面において強い負の影響を及ぼすだけでなく、仮想的有能感にもつながりやすいことが示され、挫折を自分にとってどのようなものとして位置付けていくかが、挫折経験を活かしていくことにおいて重要であると言えるだろう。

先述したように、挫折のとらえ方に関して、先行研究では神原（2009）が失敗と挫折の共通した4側面を見出し、失敗と挫折を比較したときの挫折のとらえ方についてのみ調べられている。本研究では、挫折経験そのもののとらえ方について調べた結果、「ダメージ」「自己成長」「普遍」「意欲喪失」の4つの因子が見出され、挫折のとらえ方の構成概念について示唆を得ることができ、意義があったと言えよう。

## 今後の課題

本研究では、挫折経験のとらえ方が挫折経験後の個人に及ぼす影響に深く関連していることが予想され、検討を行ったところ、本研究での仮説が支持される結果が得られた。しかし、挫折経験から受ける影響は挫折経験のとらえ方だけでなく、その対処によっても異なってくるのではないだろうか。つまり、「挫折経験のとらえ方→挫折への対処の仕方→挫折経験の影響」という一連の因果関係が予想される。これらの関連を明らかにすることにより、挫折経験が個人に与える影響について新たな知見を得られるであろう。このことを明らかにすることが今後の課題である。

## 参考文献

- 大石郁美・岡本祐子 2010 青年期における挫折経験過程と希望の関連 広島大学心理学研究 第10号  
神谷俊次・伊藤美奈子 1999 挫折体験の受容と

- 有能感 日本教育心理学会総会論文集 (41)  
p548
- 神原知愛 2009 大学生の挫折経験に関する心理学的考察—挫折観と自己成長感との関連— 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 第67号 p59-66
- 木村早希 2012 挫折経験に対するロゴセラピーの進め方に関する具体的検討 岩手大学大学院人文社会科学部研究科紀要 第21号 p45-60
- 近藤茉莉衣・宮戸美樹 2014 青年期における挫折経験の捉え方—経験内容に着目して— 日本心理学会第78回大会
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 2005 他者軽視に基づく仮想的有能感—自尊感情との比較から— 感情心理学研究 第12巻 第2号 p43-55
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 2004 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学) 51巻 p1-8
- 古木美緒・森田美弥子 2009 挫折経験から自己受容に至るプロセス—大学生を対象にして— 日本教育心理学会総会発表論文集 (51) p177
- 堀洋道 監修／吉田富二雄・宮本聡介 編 2011 心理測定尺度集Ⅴ個人から社会へ〈自己・対人関係・価値観〉サイエンス社 p37-39, p123-128

## 謝辞

本研究を実施するに当たり、質問紙調査に快くご了承くださいました先生方より、多大なるご協力をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。また、調査にご協力くださいました学生の皆さまに、心から感謝申し上げます。

(2016年10月20日受付)

(2016年12月7日受理)